

地域の協働、ソーシャル・キャピタルの形成と文化・アートの役割

渡 部 薫

1. はじめに

現在、アートプロジェクトと呼ばれる芸術・文化の表現活動を中心とする取り組みが全国各地で展開されている。地域的性格の強いこの取り組みは地域に対して様々な影響をもたらすことが指摘され、社会的関心も高く研究も進んでいる¹。その中でもとりわけ地域内での協働への影響については、地域のアートプロジェクトが人々の参加を促し、地域づくりやソーシャル・キャピタルの形成に貢献することが、既に多くの研究で指摘されている²。しかし、そもそも地域のプロジェクトは文化やアートに関わらなくても、その実現を通じて価値の創造に参加する行為であるため、相互作用を形成し協働を生み出しやすい。したがって、このような作用が文化プロジェクトだから生じたのか、文化や芸術が介在するから生じたのか、それとも、何らかの協働を必要とするような一般のプロジェクトに起きている現象と大きな違いはないのか、検討する必要がある。

本稿では、アートプロジェクトの文化・アートとしての側面に焦点を当ててソーシャル・キャピタルとその前提となる協働の形成への影響について考察を行う。なお、ソーシャル・キャピタルについては、人間関係があれば何らかの形でソーシャル・キャピタルは存在すると見る議論がある。これに従えば、ソーシャル・キャピタルの形成という言葉は適切ではないが、ここでは、自発的に協力・連携等の協働活動を促進するようなポジティブなタイプのソーシャル・キャピタルについてその形成を論じるものである。

2. アートプロジェクトとは何か

アートプロジェクトは、大企業あるいは自治体が大きく関与している瀬戸内国際芸術祭やあいちトリエンナーレのような大規模なものからアーティストの自己企画的なもの、地域の市民の地域活動的なものまで多様に展開されており全体像は捉えにくい。この現象／活動の姿を捉え伝えようとしている、『アートプロジェクト』（熊倉 2014）からは次のように理解される。美術館でもギャラリーでもない様々な場所で行われるアート活動のことを指し、作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入り込んで、個別の社会事象と関わりながら展開されている。現代アートを中心に、主に1990年代以降日本各地で展開されている「共創的芸術活動」として理解されるものである。特定の地域という場において既存の回路とは異なる接続・接触のきっかけとなることで、新たな芸術的・社会的文脈を創出する活動といえる。美術家たちが廃校・廃屋などで行う展覧会や拠点づくり、野外・まちなかでの作品展示や講演を行う芸術祭、コミュニティの課題を解決するための社会的実験的活動など、幅広い形で現れている。

熊倉（前掲書）では、何点かの特徴が指摘されているが³、地域に関わる重要な特徴として、A. サイトスペシフィック、B. 共創性について説明したい。まず、サイト・スペシフィックは、アートプロジェクトが特定の地域への志向性を持つことを説明するタームで、アートプロジェクトが地域性、あるいは場所の持つ固有の特性を尊重し、それをプロジェクトに組み込む、あるいは反映するような形で展開されることを意味する。場所の持つ固有の特性にはその土地の環境や生活空間、歴史的、政治的、文化的な場の成り立ちまで含まれる⁴。このサイト・スペシフィックという性格により必然的

に地域社会と大きな関わりを持つため、芸術以外の社会分野への関心やはたらきかけを伴い、地域に関わる様々な属性の人たちとのコラボレーションやコミュニケーションが必要とされるのである。

次に、共創性であるが、アートプロジェクトが共創的芸術活動と理解されているように、この活動の基本的な性格を示している。簡単にいえば、地域の人たちが参加し、アート関係、地域づくり関係、イベント関係等の様々な関係者が関わり、共同制作を行うことを意味している。とりわけ重要なのは市民の参加である。この言葉ではプロジェクトの主体が別にあるようにも捉えられるが、地域のアートプロジェクトにおいては、地域の人たちが主体となって企画・実施するケースが多くみられる。この共創性について、熊倉らは、アーティストのようなある特定の人だけが持つ才能ではなく誰もが持っている創造性を重視するもので、参加者全ての中に存在する創造性が何らかの方法で本人がこれまで経験したことのないような形で発露し、そしてそれらが集まると、一人で作るものよりも大きなものに発展する可能性があると論ずる（熊倉他 2015年）。アートとしての質を問う場合には、特定のアーティストに委ねる方が望ましいのかもしれないが、地域のアートプロジェクトは、地域の人々が主役となってその特定の地域の文脈の中でアートを中心に共同活動を展開するということに大きな意味があるということができる。この特性により、自分たちでプロジェクトを創り上げるということを通じて地域の市民の主体性を高め、それが契機となって地域内の活動が活発化する状況を創り出すことにもなる。また、プロジェクトへの取り組みを通じて地域内に新しいコミュニケーションの回路を生み出すことにもなる。

3. アートプロジェクト及び祭礼の影響についての先行する研究の検討

アートプロジェクトのソーシャル・キャピタルへの影響については、主に越後妻有大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭、あいちトリエンナーレなどの大規模な芸術祭が取り上げられ研究が行われている。そこでは、アートプロジェクトが地域の人々の間で協働・連携関係を促進したり活性化したりしていることを発見し、そこに地域のソーシャル・キャピタルへのポジティブな形での影響を見ている。具体的には、越後妻有については、調査対象地域においてソーシャル・キャピタルが形成あるいは革新・蓄積されたと論じられているが⁵、例えば、この中で従来ボンド型が支配的だった農村地域においてブリッジ型のソーシャル・キャピタルが形成されたという報告もある（鷲見 2014）。それに対して吉田隆之は、短期間のプロジェクトが1、2回行われただけでソーシャル・キャピタルが形成されることに疑問を抱き、代わりにソーシャル・キャピタルのプロアクティブ化という視点を導入する。これは、①地域の活動の自発性の向上と継続性、②活動のネットワークが著しく広がること及びメンバーによる参加の継続性を意味するもので、あいちトリエンナーレについては、観察したアートプロジェクトにおいてプロアクティブ化が見られたと論じている（吉田 2012, 2018）。

文化的なプロジェクトの古くからある形態として伝統的に継承されてきたタイプの祭りが挙げられるが、これについてもソーシャル・キャピタルとの関係についての研究が見られる。山田浩之は文化資本の概念も導入して、祭礼組織は祭礼を営むに必要な知（種々の知識やノウハウ）を伝承するという役割において一種の文化資本であると同時に、スムーズな協働行為が実現できるように信頼関係が構築されているという点でソーシャル・キャピタルとしても機能していると論ずる（山田 2016, p16）。稲葉は岸和田のだんじり祭りを取り上げ、祭りを構成する各町会の運営組織を通じて町会区域ごとのボンド型のソーシャル・キャピタルが醸成、そして町会間で、さらに行政やその他組織と結びつくことでブリッジ型のソーシャル・キャピタルが形成され、それがボンド型のソーシャル・キャピタルに変わって行くと論じる⁶（稲葉 2016, p36）。

4. 協働及びソーシャル・キャピタル形成への影響についての考察

4-1. ソーシャル・キャピタルの形成への影響についての考察

ここまでアートプロジェクトやそのプロトタイプとしての伝統的な祭りが地域のソーシャル・キャピタルにどう影響するかについて先行する研究を見てきたが、アートプロジェクトについては、吉田も指摘するように短期の取り組みでソーシャル・キャピタルが形成あるいは異なるタイプに変わったと論じることには、確かに難しい面があるように思われる。ソーシャル・キャピタルの持つ信頼や規範という文化的要素が短期間の取り組みが数回行われることだけで形成／再構成されたとは考えにくい。それに対して伝統的な祭りについては、山田らの研究が焦点を当てているように時代を超えて継承されてきた運営組織には、ネットワークという構造的要素を再生産するだけでなく、渡邊洋子(2013)が文化の伝承・継承空間としての役割を論じるように、信頼や規範という文化的要素を育んできた社会的基盤としての機能を見ることができる。運営組織が地域における一種の社会的基盤として働くのであれば、祭りに関わるルール・規範等の継承すべき文化的要素を蓄積・伝承することにより、ソーシャル・キャピタルを育てていると考えることができる。そうであれば、アートプロジェクトについても、越後妻有大地の芸術祭が2018年には第7回目が開催されたように、定期的な開催が繰り返されることで地域に根付いた組織あるいはネットワークが形成され継承されている場合には、伝統的な祭りの運営組織に見るような機能が醸成されることも考えられる。しかも、開催期間は短期間でもそのための準備期間はかなりのものを要する。3年ごとのトリエンナーレの場合でも運営組織は常設されており、当該年度のプロジェクトが終わってしばらくすると次回のプロジェクトの準備がはじまるのが一般的である。それを考えると、毎年でなくても2年ごと、3年ごとに開催されるような継続性のあるプロジェクトの場合、伝統的な祭りのような常設に近い運営組織が存在していることが一般的であり、ソーシャル・キャピタルに影響与えるには短期間の取り組みに過ぎないとして片付けるのは短慮であるように思われる。

さて、ソーシャル・キャピタルの形成についてももう少し考えてみたいが、ここで再び吉田の議論を取り上げると、吉田はソーシャル・キャピタルの短期的な形成に疑問を呈しアートプロジェクトの影響についてはプロアクティブ化という視点を導入する(吉田2012)。これは既に形成されているソーシャル・キャピタルが自発性を獲得することを主に意味しているが、資本である以上は継続性に影響することが必要だとしてこの面も加えている。いずれにせよ吉田のいう自発性とは端的には自発的協働を意味するようだが、これは冒頭で触れたようにアートプロジェクトでなくても何らかのプロジェクトが形成・推進されるときに、価値の創造への関与に伴って地域のアクターの行動に現れるものとして説明されるように思われる。そもそもアートプロジェクトの重要な基本特性である共創性を考えれば、既に論じたように新しいコミュニケーションの回路を生み出したり、既存の関係を強化／再編成したりすることを通じて協働関係を生み出す、あるいは強化することは、その成果として素朴に期待できるところである。必要なのは、なぜアートなのかという問いでありその答えである。すなわち、アートプロジェクトのプロジェクトとしての側面から説明されるとしても、アートの側面がソーシャル・キャピタルにどのように関わるのかについての議論が欲しいのである。共創性についてもこの点を明確にする必要がある。

4-2. 協働の形成

アートプロジェクトの影響について、議論の焦点は既にソーシャル・キャピタルというよりも地域内での協働の形成にシフトしているが、これについて文化の社会との関わり、あるいは文化の社会への作用に留意して検討してみたい。

まず、文化を使った試みが人々の協働にどう影響するかについて、資源化という概念を用いて文化と人の社会関係との関わりについて論じる文化資源論の議論を取り上げ考えてみたい。文化資源論では、潜在的資源が顕在化される、すなわち資源化されるときそこに人々の関与が生じその中で人々の間に協力関係が生まれる可能性があり、文化にもその資源化の過程でそのような可能性を見ることができると論じる⁷。そこでは文化の資源化を一種の価値の創造として捉えている。創造される価値は端的には文化的価値であるが（この概念については次項で確認されたい）、そこからさらに何らかの社会的価値⁸を生み出すことにもなる。文化的価値にしても社会的価値にしても、価値の創造という目的が人々の関与をもたらし、これを実現するための活動を生み出す。これらの価値が魅力的、あるいは意義が高いものであればあるほど、参加する人たち、関係する人たちも多くなる。このような参加者、関係者が価値の創造という目的を実現するために彼らの間に相互作用が生まれ、その中から連携・協力関係が形成されていく。もちろんこのようにならない場合もあるが、そのときには価値の創造は実現されない。地域のアートプロジェクトも一種の文化の資源化の取り組みと見ることができる。地域に存在する何らかの資源を発掘・活用することを通じて文化的価値を創造あるいは実現／表現しようとする取り組みと捉えれば、そこに関与する人たちの連携・協力あるいは協働の形成を見ることは難しいことではない。共創性は、そのような価値の創造に関わるアートプロジェクトの特徴である。これは、アートプロジェクトに関わる人たちが自らの創造性を発揮してプロジェクトの実現、すなわち価値の創造に参加し一緒になって取り組むことであるから、他のタイプのプロジェクトよりも協働を生み出す効果が大きいと考えることができる。

このような特徴は、アートや文化の持つ社会的作用に関係していると捉えた場合どのように説明できるだろうか。これを文化的価値の概念から考えてみたい。文化的価値は、文化に見出される文化そのものの本質に関わる価値を指すもので、文化の核心となる意味の領域に関わるものである⁹。そのため、人が文化に触れると文化的価値による意味作用を受けることになる。アートや文化においてはその文化的価値に触発された個人が意味を受け取り、解釈し、そこからその人個人にとっての意味を生産する。これは文化以外の価値に関わる活動においても見られるものであるが、文化的価値の場合は文化自体が意味が結晶化されたもの、あるいは意味をめぐって構成されたものであるためその意味作用が強いのである。アートプロジェクトとして文化的価値の創造や実現等に関わる場合は、その意味作用として動機付けの作用が大きく働くと考えられる。例えば、ここに地域アイデンティティを介在させて考えてみたい。地域づくりにおいては地域アイデンティティが地域の人々の行動を駆り立てる重要な役割を果たすからである¹⁰。すると、そのような文化的価値が資源化の対象となる地域の固有性、固有の文化に見出される場合、地域の人々の地域アイデンティティを刺激するような形で意味作用し、地域づくりへの大きな動機付けとして働くことが考えられるのである。

もう一つ付け加えたいのは、文化というよりはアートの持つ媒介性である。アートは日常生活から距離があり（少なくとも日常の機能的必要性からは）、地域の人々の個人的利害や既存の人間関係・社会関係との関係は希薄である。そのためアートプロジェクトは、関心を持つ人たちが自分の立場や周囲との関係を考慮することなく参加することができ、アートが媒介となって参加する人たちを比較的容易につなぐことができるという特徴を持っている。アートプロジェクトの準備や実施に関わる活動に参加するとき、プロジェクトにより実現される価値の創造への関わりを通じて、参加する人たちは自己表現をしていると見ることができる。これは、彼らが作品制作に関わることだけではなく、そのアートプロジェクトが目指す価値を通じて他の参加者や開催期間中のプロジェクトへの訪問者との間のコミュニケーション（案内・説明、もてなし等）を行うこと等にも現れている。アートは参加者個人の自己表現を媒介するのに優れた手段であり——多くのアートプロジェクトが使っている現代アートはとりわけ一般人の表現を媒介するのに優れている——アートプロジェクトはそのような機会

を提供することを通じて地域の多くの人たちを参加させ¹¹、参加する人たちを価値の創造を目的とした協働、すなわち価値の共創に導くことになると見ることができる。

4-3. ソーシャル・キャピタルの形成再考

ここまでアートプロジェクトのアートとしての側面が地域の人々の地域づくりへの参加、地域内の協働の形成にどのように影響するかについて論じて来たが、次に、ソーシャル・キャピタルの形成について考えてみたい。まず、ソーシャル・キャピタルの概念について改めて考えてみたい。ソーシャル・キャピタルは、対象となる社会における人々の協力や自発的コミットメントを生み出すような社会関係に関する概念で、一般的にその構成要素として社会的ネットワーク、信頼と規範、とりわけ互酬性の規範を認めている。社会的ネットワークは構造的要素、後の2つは認知的・文化的要素として捉えられる。

ここで重要なのは、対象となる社会をどう設定するかということだ。社会をマイクロ、メゾ、マクロのレベルに分けた場合、それに対応してそれぞれソーシャル・キャピタルについて異なる論じ方がされている¹²。マイクロレベルでは、ソーシャル・キャピタルは個人間等のネットワークにおいて、個人的利益の実現という目的に対する他者の協力を生み出している。マクロレベルでは市民社会という社会全体を対象として、公共的課題への人々の前向きな関わりを支えている。また、メゾレベル、すなわちコミュニティやアソシエーションにおいては、その内部でのメンバーの自発的な協働を生み出している。これらのアウトプットは、基本的にはそれぞれの社会関係を支える人の協力・コミットメントとして捉えることができる。留意すべきは、構成要素としての信頼や規範のあり方がレベルによって異なることである。例えば、マクロとメゾで比較すると、マクロレベルにおいては市民社会全体における一般化された信頼や互酬性が求められる。それに対して、メゾレベルで求められるのは、コミュニティやアソシエーション内部における限定されたメンバー間の特定化された信頼や互酬性である。

アートプロジェクトの社会への影響は基本的には地域社会において考えられるものであるため、メゾレベルのソーシャル・キャピタルが考察の対象となる。すると、構造的要素としての社会的ネットワークも認知的・文化的要素としての信頼や規範も比較的狭い範囲の限定されたメンバー間の関係に見られるものとなる。そのような関係においては、メンバー間の相互作用の蓄積が大きな意味を持つことになる。諸富は、ダスグプタの議論を援用して、ソーシャル・キャピタルの蓄積においてはメゾレベルの社会を構成するメンバーが繰り返し遭遇するという条件の重要性を強調する(2010)。メンバーが繰り返し継続的に接触しコミュニケーションが展開することで信頼醸成が促され、公式・非公式のネットワーク形成を助けることで、彼らがお互いに協力しあって問題を解決する能力が形成されると主張する¹³。

上述した伝統的な祭りのケースでも、継承された運営組織をベースに実施までの準備期間において参加する地域の人々の間で役割分担を伴う協力体制に基づいて共通の目的のための意思疎通、合意形成、問題への対応などのプロセスを経ながら密接な相互作用が展開される(渡邊 前掲論文)。このようなプロセスを通じて、新しい関係が生まれたりこれまでの関係が確認されたりしながら、目的に向かって一つ一つの作業に取り組む過程で参加する人たちが継続的に顔を合わせやり取りを続ける中で、次第に他のメンバーへの信頼関係が生まれ、お互いにどのように協力し合えばいいかという規範——協力には通常互恵の関係が必要なので互酬性の規範も含まれていると考えられる——も形成されていくのである。伝統的な祭りではこのように信頼や規範は、そのときの祭りの準備のプロセスを通じてそこに参加した人々の間に少しずつ変化しながらも伝承されていくのであるが、アートプロジェクトのような新しく展開されるプロジェクトでは、そのプロセスの中で新たに形成されていくことになる。

それがどこまでソーシャル・キャピタルを支えるほどの信頼や規範となるかどうかは、伝統的な祭りに見るように、結局はある程度の恒常性を持った組織をベースにしたプロジェクトの継続性が大きなカギになると思われる。

以上のようにネットワークの強化も信頼や互酬性の規範という文化的・認知的要素の形成も基本的には相互作用の積み重ねの中で生まれてくると考えることに問題はないだろう¹⁴。そのとき、相互作用とは上述したように何らかの価値の創造を目的とした関係に基づいて参加・関係する人たちの間で展開されるものとして理解されることになる。ソーシャル・キャピタル形成についてのこのような議論から、上述のアートとしての特性から導かれる協働の形成についての議論を踏まえると、アートプロジェクトについては次のように論じることができる。アートプロジェクトという一種の価値創造のプロジェクトは、アートに内在する文化的価値の持つ意味作用やアートの持つ媒介性によって人々の参加を促し共通する目的に向かって参加者・関係者間で連携・協力あるいは協働関係を形成し、そこで生み出される相互作用の蓄積によってソーシャル・キャピタルの形成に寄与すると考えることができる。本研究の中で発した、なぜアートなのか、アートプロジェクトのアートの側面がソーシャル・キャピタル形成にどのように関わるのかという問いに対しては、アートプロジェクトがアートであるがゆえに持つ文化的価値やアートの特性としての媒介性が、地域の価値創造のプロジェクトとして、ソーシャル・キャピタルの形成に必要な相互作用を生み出しやすいとして答えることになる。

しかし、その相互作用の蓄積がどこまでソーシャル・キャピタルの構成要素であるネットワークや信頼、規範の形成、とりわけ文化的要素である信頼や規範を形成できるかについては、上述したようにある程度の恒常性を持った組織をベースにしたプロジェクトの継続性を考える必要があるが、それに加えて相互作用のあり方も問う必要がある。単にアートプロジェクトが開催されるだけでソーシャル・キャピタルが形成されると考えられない。アートプロジェクトでは、期間限定のプロジェクトの実現を目指して準備する中で参加者・関係者間で比較的密度の高い相互作用が展開され、その中でソーシャル・キャピタルを構成する構造的要素も文化的要素も育まれるのであるから、その相互作用のあり方を改めて問わなければならない。アートプロジェクトの準備プロセスにおける、参加・関係する人々の間の相互作用が置かれている状況を一種の社会空間として捉えた場合、これをどう分析するかが問われることになる。

5. まとめ及び今後の展望

本稿では、アートプロジェクトの文化・アートとしての側面に焦点を当てて地域の人々における協働及びソーシャル・キャピタルの形成への影響について考察を行った。論点となったのは、アートとしての特性がどのように協働の形成に作用するかということだったが、本稿ではアートに内在する文化的価値の持つ意味作用やアートの持つ媒介性に注目し、これらの作用によって人々の参加を促し共通する目的に向かって参加者・関係者間の協働関係の形成を促進する可能性が生じるという解釈を得た。ソーシャル・キャピタルの形成については、それに必要な相互作用をアートプロジェクトによって形成されたこの協働関係が生み出すことによって寄与することになる。しかし、最後に論じたように、ソーシャル・キャピタルの形成にとって相互作用が重要であれば、そのあり方を問う必要がある。

この課題に対しては、一つのアプローチとして、この社会空間に〈場〉の議論を適用することを考えてみたい。〈場〉とは、人々が一定の相互作用する状況の枠組みのことで、コンテキストを共有するメンバー間で目的あるいはミッションの実現に向けた相互作用が行われ、この相互作用を通じて情報集合（認識）が変化すると論じられる¹⁵。ソーシャル・キャピタルの文化的要素はこの情報集合に

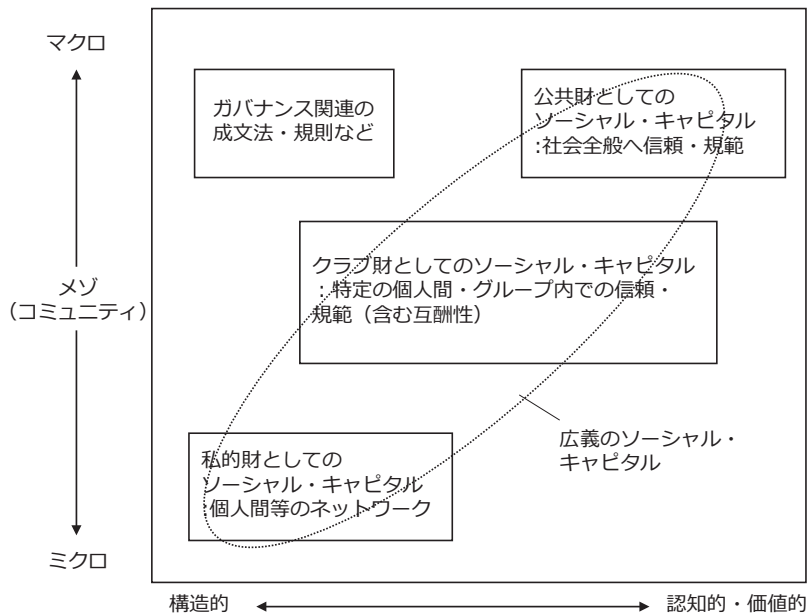
該当する。〈場〉の成立要件については、簡単にいえば、定義が示しているようにメンバー間でコンテキストが共有されていることである。目的、ミッションあるいは目指す方向が共有され、連帯あるいは共同しようとする意思が共有されている場合、コンテキストの基本的土台が醸成されていると見ることができる¹⁶。これを伝統的な祭りに適用してみると、運営組織という代々引き継がれた社会的基盤とミッションとしての伝統の継承という非常に明確なものがメンバー間ではほぼ異論がなく共有されている。それに対して、アートプロジェクトの場合は、プロジェクトを実現したいという思いやある程度の方向性は共有されていても、それぞれのプロジェクトに寄せる思いは必ずしも共有されているとは限らない¹⁷。しかも、祭りが持つ運営組織のような地域に根付いた社会的基盤も持っていない。このようにコンテキストの形成に必要な要素を見ることによって〈場〉という状況が対象となるアートプロジェクトに成立しているのか、あるいはどのように現れているのか、また、アートとしての側面はどう作用しているのかについて分析・検討し、それを通じて信頼や規範のような文化的要素の形成について考察することができる。アートプロジェクトによるソーシャル・キャピタルの形成過程については、このような〈場〉の議論を使ったアプローチを具体的な事例に適用して分析することが一つのアプローチとして考えられるが、このアプローチ自体の可否を含めた検討及びその事例への適用については今後の課題としたい。

-
- 1 海外においては、日本の地域の市民主体のアートプロジェクトのような小規模な取り組みについての研究も見ることができる。例えば、英国においては、やや古くなるが、Newmanらは、コミュニティに足場を置いたプロジェクトの地域にもたらす効果・影響についての先行研究のレビューを行なっている (Newman, Curtis and Stephens 2001)。それによると、経済的効果に加えて、コミュニティ・エンパワメント、社会的統合、地域内の協働の促進、地域アイデンティティの確認、健康への影響等の社会的影響、孤立状態の緩和や創造性の向上等の個人への各種の影響、教育的効果が挙げられている。
 - 2 多くの研究を挙げることができるが、ここでは次のものを主な参考とした。松本・市田・吉川・水野・小林 (2005)、吉田 (2012, 2018)、鷺見 (2014)、寺尾 (2014)、野呂田・椎野 (2014)、Arcodia and Whitford (2006)、Sacco and Blessi (2009)、Kay (2000)、Ferilli, Sacco and Noda (2015)、Lieu (2017)。
 - 3 次のように説明される (熊倉 前掲書：p.9)。
 - a. 制作のプロセスを重視し、積極的に開示
 - b. プロジェクトが実施される場やその社会的状況に応じた活動を行う、社会的な文脈としてのサイト・スペシフィック
 - c. 様々な波及効果を期待する、継続的な展開
 - d. 様々な属性の人々が関わるコラボレーションとそれを誘発するコミュニケーション
 - e. 芸術以外の社会分野への関心やはたらきかけ
 ここに共創性が含まれてないのは、アートプロジェクトを既に共創的芸術活動として説明しているからである。
 - 4 この説明は中山 (2018) を参照している。
 - 5 大地の芸術祭を調査した、松本・市田・吉川・水野・小林 (前掲)、鷺見 (前掲)、寺尾 (前掲) の論文に基づく。
 - 6 より詳しくいうと、稲葉は、ブリッジ型の一種として、町会レベルと行政レベルの間に存在する

ものとして、立場上の上下間関係にある集団をつなぐというリンク型ソーシャル・キャピタルという概念を当てている（稲葉 前掲書）。

- 7 佐藤仁（2008）、佐藤健二（2007）を参照している。
- 8 社会的価値については明確な定義は確立されていないが、ここでは、個人や企業、あるいは組織としての行政に対する私的あるいは局所的な価値ではなく、広く社会一般に対して意義のある価値として捉える。
- 9 文化とは、人類学的研究の流れの中では、その核心は意味の領域に帰着すると考えられているように（徳安 1985：p.27）、制度的なものにしても、文化財のようなものにしても、人に意味を問いかけてくるところに中核があり、それを具体化する、あるいはその手段となる何らかの媒体としての実体を伴うものであるということが出来る。スロスビーの文化的価値の解釈においても、その一つの属性として象徴的価値を挙げ、文化的対象についての意味の本質を表し、個人がその意味を引き出すものと説明している（Throsby 2001）。
- 10 これについては、拙著『都市の自己革新と文化』（2009：pp.223-4）、Miles（2005：p.923）を参照されたい。
- 11 ここでは言及していないが、もちろんアーティスト個人自体も重要な要素である。多くの調査でもアーティストの熱意が地域の人々の参加意欲に影響していることがわかる。ここでは簡略化して、これもアートが媒介するものとして捉えている。
- 12 ここでは、稲葉（前掲書）の整理に従っている。稲葉が作成した図を掲示するが、本稿の議論にとって重要なのは、あくまでミクロ、メゾ、マクロの分類であり、それがどのような社会から構成されているかを捉えることである。

図表1：ソーシャル・キャピタルの概念整理——3つのソーシャル・キャピタル



出典：グロタルトラの論文を参考に稲葉陽二が作成

- 13 諸富は、バングラデシュにおいてグラミン銀行が貧しい人々に行っているマイクロ・クレジットと呼ばれる融資の試みを引用し、この銀行が借り手を組織して形成したグループの中で見られる借り手間の協力関係の中にソーシャル・キャピタルの形成を読み取り、ダスグプタの議論を適用し解釈を引き出している（諸富 2010：pp.265-7）。

- 14 ソーシャル・キャピタルが相互作用の積み重ねから形成、あるいは変化が生じることは、上述の諸富に限らず多く指摘されている。例えば経済学では関係財（relational goods）の蓄積という議論がある。また、社会学では交換理論を中心により詳細な議論が展開されている。
- 15 この概念の主要な提唱者である伊丹敬之（1999, 2000）の主張に基づく。
- 16 詳しい検討は、前掲の伊丹敬之（1999, 2000）を参照されたい。
- 17 例えば、1993年から2018年の現在まで毎年開催されている神奈川県葉山市の葉山芸術祭では、葉山町の市民有志から構成される実行委員会によって運営されているが、実行委員メンバーの一人松澤親利氏によると、メンバーは好きでやっているというのが基本で、動機は様々である。松澤氏自身は、葉山という町を楽しくしたいが、まちづくりのためというよりは自分が楽しむためにやっているとのことである。他には、まちづくりへの展開を考えている人や自分のビジネスに結びつけている人等様々である。

〈参考文献〉

- あいちトリエンナーレ実行委員会（編），2016，『あいちトリエンナーレ2016 虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅』，平凡社
- 伊丹敬之，1999，「場のマネジメント序説」，組織科学，26巻1号，pp.78-88
- ，2000，「さまざまな『場』」，伊丹敬之・西口敏弘・野中郁次郎（編著）『場のダイナミズムと企業』，東洋経済新報社，pp.1-43
- 稲葉陽二，2016，「都市祭礼とソーシャル・キャピタル」，山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考える—ソーシャル・キャピタルと文化資本—』，ミネルヴァ書房，pp.20-43
- 熊倉純子（監修・編著），2014，『アートプロジェクト—芸術と共創する社会—』，水曜社
- 熊倉純子・長津結一郎・アートプロジェクト研究会，2015，『「日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年」補遺』
- 佐藤 仁，2008，「今なぜ資源配分か」，佐藤仁（編著）『資源を見る眼——現場からの分配論』，東信堂，pp.3-31
- 澤村 明（編），2014，『アートが地域を変えたか——越後妻有の芸術祭の十三年 2010-2012』，慶應義塾出版会
- 瀬戸内国際芸術祭実行委員会・北川フラム（監修），2017，『瀬戸内国際芸術祭2016 公式記録集』，
- 竹口弘晃，2013，「地域の文化的資源の顕在化に関する研究—『文化の資源化』と『コンテキスト転換』による価値の発言の視点から—」，文化政策研究，7号，pp.81-98
- 寺尾 仁，2014，「大地の芸術祭と人々——住民、こへび隊、アーティストが創り出す集落・町内のイノベーション」，澤村明（編著）『アートが地域を変えたか——越後妻有の芸術祭の十三年 2010-2012』，慶應義塾出版会，pp.101-146
- 徳安 彰，1985，「行為における“意味”と文化システム—パーソンズとルーマン—」，思想，第730号（1985年4月号）
- 中山亜美，2018，「サイト・スペシフィック」、アートスケープ：<http://artscape.jp/artword/index.php/>，2018年3月15日に最終アクセス
- 野呂田純一・椎野信雄，2014，「現代アートによる地域・都市間の〈関係性〉の組み換えの可能性」，湘南フォーラム，18号，pp.89-101
- 松本文子・市田行信・吉川郷主・水野啓・小林慎太郎，2005，「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通じたソーシャル・キャピタルの形成」，環境情報科学論文集，19号，pp.157-162
- 諸富 徹，2010，『地域再生の新戦略』，中央公論新社

- 山田浩之, 2016, 「都市祭礼と文化経済学」, 山田浩之(編著)『都市祭礼文化の継承と変容を考える—ソーシャル・キャピタルと文化資本—』, ミネルヴァ書房, pp.10-19
- 吉田隆之, 2012, 「アートプロジェクトによる人的協力・ネットワーク及びソーシャルキャピタルのプロアクティブ化: あいちトリエンナーレ2010長者町会場を事例に」, 文化経済学, 9巻1号, pp.90-100
- , 2015, 『トリエンナーレは何を目指すのか——都市型芸術祭の意義と展望』, 水曜社
- , 2018, 「芸術祭によるソーシャル・キャピタルのプロアクティブか—あいちトリエンナーレ2010・2013と2016の比較—」, 文化経済学, 15巻1号, pp.102-118
- 若林直樹, 2003, 「社会ネットワーク組織間での信頼性——『埋め込み』アプローチによる経済社会学的考察——」, 社会学評論, 54巻2号
- 鷺見英司, 2014, 「越後妻有大地の芸術祭とソーシャル・キャピタル」, 澤村明(編)『アートが地域を変えたか——越後妻有の芸術祭の十三年 2010-2012』, 慶應義塾出版会, pp.63-99
- 渡部薫, 2010, 『都市の自己革新と文化—ひとつの都市再生論—』, 日本経済評論社
- , 2017, 「地域づくり活動の持続可能性についての検討—地域プラットフォームの形成と再構成に焦点を置いて—」, 地域デザイン, 9号, pp.33-53
- 渡邊洋子, 2013, 「『祭り』という文化伝承・継承空間」, 円環する教育のコラボレーション, 18巻, pp.120-131
- 北川フラム, 2015, 『ひらく美術——地域と人間のつながりを取り戻す』, 筑摩書房
- 北川フラム・大地の芸術祭実行委員会(監修), 2016, 『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2015 地球環境時代のアート』, 現代企画室
- Arcodia, C. and Whitford, M., 2006, 'Festival Attendance and the Development of Social Capital', *Journal of Convention and Event Tourism*, 8(2), pp.1-18
- Ferilli, Sacco and Noda, 2015, 'Culture driven policies and revaluation of local cultural assets: A tale of two cities, Otaru and Yubari', *City, Culture and Society*, 6, pp.135-143
- Kay, A., 2000, 'Art and community development: the role the arts have in regenerating communities', *Community Development Journal*, 35(4), pp.414-424
- Lieu, Y., 2017, 'The impacts of cultural event on networking: Liverpool's cultural sector in the aftermath of 2008', *Impact Assessment and Project Appraisal*, 35(2), pp.118-127
- Miles, S. (2005) "Our Tyne: Iconic Regeneration and the Revitalisation of Identity in NewcastleGateshead", *Urban Studies*, vol.42(5/6), pp.913-926.
- Newman, Curtis and Stephens, 2001, 'Do community-based arts projects result in social gains? A review of literature'
- Taylor, P., Davies, L., Wells, P., Gilbertson, J. and Tayleur, W., 2015, 'A review of the Social Impacts of Culture and Sport', Department for Digital, Culture, Sport and Media, UK.
- Sacco and Blessi, 2009, 'The Social Viability of Culture-led Urban Transformation Processes: Evidence from the Biococca District, Milan', *Urban Studies*, 46(5/6), pp.1115-1135
- Throsby, D., 2001, *Economics and Culture*, Cambridge: Cambridge University Press (=中谷武雄・後藤和子監訳, 2002, 『文化経済学入門—創造性の探究から都市再生まで—』, 日本経済新聞社)

A Consideration on an Art Project's Contribution to the Facilitation of Collaboration and Formation of Social Capital in a Local Community with focus on the aspect of Culture or Art

Kaoru Watanabe

Today, the activities called an art project are unfolded all over Japan. They aim to express art and culture in various forms with a prominent characteristic that they try to involve local citizens. It is pointed out that they have a variety of influences over local communities, and there are many studies arguing that they contribute to the facilitation of community development and the formation of social capital. The problem is what role the aspect as an art play in the contribution or influence. This research examined the influence of an art project over the generation of collaboration and formation of social capital with focus on their aspect as culture or art. Paying attention to the signification that cultural value of art produces and the role of mediation which art is supposed to play, the research gained the understanding that an art project through such workings has the possibility of facilitating local people's participation in the project and collaboration among those involved towards their shared purpose. The research, furthermore, reached the interpretation that such a collaboration produced by an art project may lead to the formation of social capital because a collaboration is supposed to generate interactions among people which are an essential basis for the formation of social capital. This interpretation generated the further question of what the interactions are like. How to approach and analyze the interactions remains to be solved.